

## 事業の実績

能登半島地震の被災地支援を通じた学生のレジリエンスおよびリーダーシップの養成を目的として、輪島市・珠洲市・能登町において災害ボランティア活動を行った。学生2名が参加し、教員1名が引率した。当初、4名の学生が参加する予定であったが、出発1週間前に2名が辞退した。

7月23日と8月9日に事前オリエンテーションを実施した。8月9日以降は、メール等にて活動の内容（炊き出しのメニュー等）の話し合いを行った。現地活動期間は9月6日から10日である。

9月6日は、金沢駅でレンタカーを借りた後、焼きそばの材料を調達し、奥能登に向かった。夕方、能登町上町公民館を見学し、拠点となる真宗大谷派災害ボランティアセンターに到着した。9月7日は、早朝から焼きそば約50食をつくり、能登町上町公民館にて焼きそばとかき氷の提供を行い、来場者と交流した。9月8日は、早朝から焼きそばを50食つくり、珠洲市の高屋地区へ移動し、漁港の前で焼きそばとかき氷を提供しながら被災者からお話をうかがった。9月9日は、午前中、輪島市河井町の仮設住宅にて被災者のお話を伺った。午後は輪島市の仮設住宅で支援物資をお渡ししながら各戸を訪問してお話を聴いた。9月10日は、前日と同様、輪島市の仮設住宅にて支援物資を提供しながら戸別訪問した。

帰熊後、学生はレポートを作成した。9月8日の北國新聞にて活動が紹介された（写真）。また、12月18日に熊本日日新聞の堀江記者の取材を受け、12月31日の同紙社会面に学生の活動が大きく掲載された。



品定めを楽しむ来場者—能登町上町公民館

能登町上町公民館と岩井戸公民館合同の「復興フリマ&物々交換会」は7日、上町公民館で開かれた。大勢の来場者が衣類や食器類を持ち寄る中にも、格好で販売された雑貨や陶器などの品定めを楽しんだ。被災した自宅を片けた際、当初で初めて準備し、フリママーケットには町内外の6個人と6団体が参加した。パン店や花店、生活雑貨店も商品を販売し、熊本学園大の高林秀明教授と学生2人は焼きそばとかき氷を振る舞った。

被災地から  
フリマや物々交換で品定め

被災地から

劇を披露する出演者  
—七尾市の能登演劇堂

## 具体的な成果

活動を経験した学生は次のようなレポートを作成した（一部、抜粋）。「能登町では、地震の影響で保育園のプールに入れなくなってしまったという親子の話の聞き、地震の与える影響は、子どもたちの暮らしや楽しみにも及ぼしてしまっていることを実感しました。また、珠洲市では、地震の影響で港が隆起してしまって、船が出せなくて漁師さんはお休みしていると聞き、生活への支障が大きいと感じました。」学生は焼きそばとかき氷を通じた交流の中で、被災者の生活に目を向けている。

学生らは制度や行政の課題についても考えた。「60代の男性の方は『一部損壊で判定され、支援金がなくて大変だ』と話をされていました。被災者生活再建支援金は一部損壊では受けられないそうです。家の損壊が少ないから生活できるわけではなく、障害年金の受給基準などを学んでいます。障害年金も『障害が軽いから生活ができる』というわけでは決してないことと、重ねて話を聞いていました。輪島市では、行政は被災者の声を施策に反映させていないというお話を伺い、行政と被災者のギャップの問題を知りました。」

「仮設住宅の訪問の際（写真）、会話をしていく中で、私たちに言ってくれた『あなたたちはそのままでもいい、こうやってボランティアに来てくれたことはとても凄いことだから、自信持ていい』という言葉が心に残りました。被災者の皆さんからの思いが詰まった言葉に、私はこの活動に参加してよかったと心から思える経験になりました。」

学生は、3年以上に及んだコロナ禍が高校生時代と重なり、社会活動への参加の機会が得にくかった。参加学生たちは、被災者の厳しい生活実態とともに、その中から立ちあがろうとする人々のレジリエンスにも触れて、日頃の自身の学生生活や生き方に大きな刺激を受けた。また、自らの学びの主体性とリーダーシップを高める経験を得られた。一人ひとりの学生の成長が熊本・九州での災害への事前準備と地域貢献につながることを確信する。

